おそらの　とびら

紫月

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=16235429

ヒュンマ, バルトス

ヒュンケルがバルトスに贈った、星のペンダントをめぐるお話。

2021年10月17日、ヒュンマフェス・オータムが開催されました。
おめでとうございます＆ありがとうございます！
それに寄せて、「秋のお話」として書かせていただきました。
これまでも何度か、バルトス養父さんを作中に登場させたことはありましたが、
きちんと書くのは初めてだったので、切なくも楽しかったです。

素敵な表紙素材は、こちらからお借りしました。illust/68732678

★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆

お寄せいただくうれしいお言葉、ブックマークや「いいね」、
いつも本当にありがとうございます！すごく励みになっています。

★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆★☆

おそらの　とびら

今夜は、月が見えない。
そういえば、数日前にはずいぶんと痩せた月を見た記憶があるから、きっと今夜は、新月なのだろう。上空を仰ぎ見れば、そこには雲もほとんどなく、星々がちかちかと瞬いている。
秋の星空は、穏やかな顔をしている。際立って明るい星がないためだろう、いつもは美しい月明かりにそっと寄り添うばかりだけれど、主役が不在の今日のような夜には、控えめながらも美しく、藍色の夜空を彩っている。その優しい佇まいを、好ましいと、ヒュンケルは思う。きらびやかでは決してなく、それでいて隠しきれない輝きたち。
森の中の小路を、家へと向かって歩く一時。天空からの灯りが少ない分、こんな夜には、視覚以外の感覚が研ぎ澄まされるようだ。例えば、先ほどから耳をくすぐる虫の声も、いつもより冴え渡り、より澄んで響くように思われる。梢を揺らして渡る、風の囁き。そして、隣を歩く女性とふたり、足元で踏み砕く落ち葉の、しゃりしゃりという音も。
上空に吹き遊んでいた風が、気まぐれに、そんな彼らの側に舞い降りる。甘い香りが鼻孔をくすぐり、木立の奥に咲き乱れる花の姿を、ヒュンケルは思い浮かべる。そしてすぐに、それは花の蜜ではなく、隣を歩くマァムから放たれたものだと思い至る。ふたりきりで過ごす密やかな夜に、彼を柔らかく温かく包む、肌の香りだ。
何よりも心を寛がせる、慣れ親しんだ香に、夢見心地になっていたヒュンケルは、だから、突然マァムがあげた声に、反応するのが一瞬遅れた。
「あ、流れ星！」
歩みを止めた彼女から、二、三歩先に進んだところで、彼もまた、立ち止まった。反射的に空を見上げても、彼女が見付けた光の尾は、すでに名残を留めていない。しかし、振り返って見れば、そこには、星の煌めきにも負けない、清らかに輝くマァムの笑顔があっ

た。
「今、今ね。流れ星が見えたの。たまたま見上げたら、すうっ、と」
薄闇の中にあってさえ、頬がほんのり紅潮しているのが見て取れる。不意の邂逅に、無邪気に興奮した様子のマァムは、見守るヒュンケルの傍らに寄り、空の一点を指差してみせた。
「あの辺りにね。でも、残念。あっと思ったときには、もう消えてしまって、願い事を言う間もなかったわ」
「そうか」
「うん。見付けてから考えるんじゃ、とても間に合わないわよね」
あまりに残念そうな口調が愛らしく、ヒュンケルの頬も、我知らず緩む。そのせいだろうか、記憶の中にあるフレーズが、ついつい口をついて零れてしまった。
「〝おそらの とびら〟が、開いたんだな」
すぐに、しまった、と、思ったが、もう遅い。聞こえなかったことを期待して、肩越しにマァムを見遣れば、願いは虚しく、彼女は目をまん丸く見開いて、まじまじとこちらを見つめていた。
「お空の、扉？」
「あ……いや……」
別段、聞かれて困ることでもない。ただ、日ごろの彼に似つかわしくない(というより、彼を知る者であれば誰であれ、想像すらしないであろう)、幼児ことばを遣ったということに、ヒュンケルは羞恥を覚えずにはいられない。気まずさをごまかすように、意味もなく、小さな咳払いなど、してしまう。
「その……なんだ、昔、養父が読んでくれた絵本の中に、そういう言い回しがあったんだ。流れ星に関する物語だったから、それで、つい……」
気恥ずかしさに、顔を背けて語りながら、何故、こんなにも言い訳めいた話し方をしているのかと、自分自身を揶揄する声が、頭の片隅で冷静に響く。マァムの顔には、どんな表情が浮かんでいるのかと、おそるおそる視線を戻せば、そこにあるのは、なんとも優しい、慈しみに満ちた眼差しだった。
「そう……お養父さんが……」

呆れられずに済んだらしいことに、とりあえず、ほっとする。同時に、これまで彼女に聞かせたことのある、養父とヒュンケルの物語は、悲しくつらいものばかりであったことに思い至り、こんなささやかなエピソードにさえ、喜んでくれているマァムの愛情に、彼は愛しさと感謝が溢れてくるのを抑えきれなかった。
「ああ……何冊かあった絵本の中でも、特に気に入った話だった。何度もせがんでは、繰り返し読んでもらったものだ」
「そうだったのね……ね、どんなお話だったの？」
「熊の親子が、秋の夜に、流れ星を見付けるんだ。冬眠に入ってしまう前に」
「聞きたいわ。聞かせてくれる？覚えている？」
ヒュンケルは、マァムの大好きな、ひっそりとした笑みで答える。
「覚えている……それこそ、暗記するほど、読んでもらったからな。だが」
言いながら、彼は彼女の手を取って、再びゆっくり歩を進めた。
「歩きながら話そう。このまま、ここで立っていては、身体が冷えてしまうからな」

＝＝＝＝＝★＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

『とうさん、とうさん』
こぐまは とうさんに たずねます。
『どうして おそらは ひかったの？かみなり みたいに こわい ものなの？』
『いやいや、ぼうや。あんしん おし』
どっしりとした やさしいこえで、とうさんぐまは こたえます。
『あれはね、ぼうや。ほしの しっぽ。おほしさまが、おそらを ながれた あとなんだよ』
『おほしさま？』
ぼうやの めは、おほしさま みたいに、きらきら きらきら かがやき

ます。
『どうして おほしさまは ながれたの？』
『それはね、ぼうや』

『『おそらの とびらが ひらいてね、かみさま、おかおを のぞかせたから』』

絵本を読み聞かせるバルトスの声に、ヒュンケルの声が重なった。
―――はははは、ヒュンケルは、ここが好きだなあ。すっかり、覚えてしまっているではないか。
―――うん！ここだけじゃないよ。もっと言えるよ。
誇らしげに言うと、ヒュンケルは、物語の続きを諳じてみせる。

『だからね、ぼうや。ながれぼしを みつけたら、おねがいごとを してごらん。かみさま、ねがいを かなえてくれる。いいこに してたら、きっと、きっとね』

―――おお、本当だ。ヒュンケルは、聡い、いい子だなあ。
〝サトイ〟の意味は解らなかった。でも、大好きな養父に〝いい子〟と言ってもらえたことで、ヒュンケルは、心底うれしそうな顔をする。そんな息子の頭を、バルトスは、愛しげにくしゃくしゃと撫で回してやった。
ヒュンケルは、バルトスの６本の腕が、大好きだった。今も養父は、ヒュンケルの髪をかき回しながら、２本の腕でしっかりと、膝の上の息子を抱え、また別の２本では、絵本をきちんと開いている。そして、残る１本が、ヒュンケルの頬に伸ばされ、そっと撫でてくれるのだった。
親子なのに、どうして、ぼくには、腕が２本しかないのだろう。大きくなったら、とうさんみたいに、なれるのかな？
聞いてみたいと思ったけれど、一瞬の後、まあいいや、と、ヒュンケルは思い直す。養父とは、これからもずっと一緒なのだし、またいずれ、いつでも教えてもらうことは出来るだろう。
それよりも今は、目の前の物語に関して、尋ねたいことがあった。

———ねえ、とうさん。
———ん？
———とうさんは、お星様が流れるのを、見たことはある？
———そうさなあ、何回か、目にしたことはあるかな。
———うわあ！
ヒュンケルは、まだ、星空を見たことがなかった。視線をバルトスから本に移し、描かれた絵を、まじまじと眺める。空中に、こんなにもたくさん、光るものが浮かんでいるのは不思議だし、それが落ちてきたら怖いと思う、子熊の気持ちも理解出来るような気がした。一方で、それは、なんとも綺麗な光景であるようにも思えた。
———ねえ、それで、とうさんは、どんなお願い事をしたの？
———うーん……実は、願い事をしたことはないのだよ。
———ええ！？どうして！？
———流れ星というものは、本当に一瞬しか見えないものでな。あっ、と、思ったときには、もう消えてしまっているのだよ。ほら、お話の中にも書いてあるだろう？戸の隙間から漏れた光が、お星様になって流れるが、お空の扉は、すぐに閉まってしまうのだ、と。そして、神様はお顔を隠してしまうのだ、とな……わずかなその時間に、お願いをすることが出来れば、神様にも、その声が届くのかもしれんなあ。
———そう……そうなんだ。
どうやら、憧れた場面は、なかなか実現の難しいものであるらしい。少ししょんぼりとした息子を励ますように、バルトスは、明るく笑ってみせる。
———ははは、そんなにがっかりすることもない。子熊だって、ちゃんと願い事が言えたことを、お前も知っているだろう？ほら、続きを読もうではないか。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝★＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「それで、子熊はどうなるの？」
少し、風が強くなってきたようだ。マァムは、気にする素振りも見せなかったが、ヒュンケルは、繋いだ手をほどき、風から庇うように、その手を彼女の肩に回す。素直に身を預け、近くなったヒュンケルの顔を見上げる瞳は、あの子熊のようにきらきらと輝いていた。
「子熊は、その後、父さん熊と流れ星を待ち続けるんだ。秋の夜は寒くて、でも、自分を抱いていてくれる父さんの身体は、大きく温かくて、うとうとしそうになりながらも、願い事をしたい一心で頑張るのさ」
「うわあ、すごく可愛らしいわ。それで？」
そうせがむマァムこそ、たまらなく愛くるしいと思うものの、簡単に口に出来る性格でもない。そこでヒュンケルは、彼女の肩を抱く手に力を籠め、そよぐ柔らかな髪に、触れるか触れないかのキスを落とす。マァムは、一瞬、驚いた顔をしたものの、すぐに目元をふうわりとほころばせると、
「あなたも温かい」
と、照れた様子で呟いた。
「子熊の気持ちが、解る気がするわ」
そうか、と、優しく微笑むと、ヒュンケルは、物語の続きを語って聞かせた。
「子熊が、眠くて眠くて我慢が出来なくなった真夜中に、とうとう星がひとしずく、流れるんだ。眠りに落ちる直前に、子熊は、その星に祈りを捧げる」
「よかった……どんな願い事を？」
「目覚めても、ずっと父さんといられるように、と。そして子熊は、そのまま、長い冬の眠りに就く———そういう話だった」
「そう……」
マァムは、ただ一言、そうとしか言えなかった。幼いヒュンケルが、物語の中の子熊に、自分自身を投影して見ていたことは、確かだったことだろう。暗い地底の城の中で、父子が一緒に絵本を眺めていたときから、彼らの別れの日までには、一体、どれだけの時が許されていたのか。それを思えば、小さな少年の願いが踏みにじら

れた現実に、切なさや哀憐の情も湧いて出て、ともすれば、声音もしっとりと、悲しげなものになりかねない。
しかし、彼女の肩に優しく手を回しながら星を見上げる、もう幼くはない青年の表情は、今夜の空のように、静かに穏やかなものだった。マァムは、表層に現れかけた哀しみを、ぶるりとひとつ、頭を振るうことで追い払う。いきなりどうしたことかと、視線を寄越したヒュンケルに、
「髪が、顔に掛かっちゃったわ」
と、マァムは、にこりと笑ってみせた。
「素敵なお話ね」
「ああ……空いっぱいに描かれた星の様子や、森の中のほら穴で熊が眠る姿や、心を惹かれる点の、多くある本だった。しかし、なんといっても、やはり１番に魅力的だったのは、流れ星の存在だったな」
切れ長の目が、すっと細められ、星に注がれる眼差しが、宙よりももっと遠く、時空を越えた場所を見つめる。ふっと、吐息のように小さな笑い声が漏れ、そんなヒュンケルを、マァムはもの問いたげに覗きこんだ。
「ヒュンケル？」
「ああ……いや、すまない。思い出したことがあって」
「ん？」
「星を見たこともなかったオレにとって、願いを叶えてくれるという、流れ星の物語は、憧れだった。実際に目にすることは出来なくても、なんとかして、その存在を感じたかったのだろうな。それで――」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝★＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

――とうさん、おかえりなさい！
城周りの見回りを終え、地底深くの居室に戻ってきたバルトスを、

ヒュンケルは、うれしそうに出迎えた。
いつもなら、とうに幼子は、夢の中にいるはずの時刻だった。自分を待っているのは、無邪気な寝顔であるとばかり思っていたバルトスは、思いがけない出迎えに、小さく驚く。何か非常事態が起こったのかとの懸念が、一瞬、頭を掠めたものの、息子の明るい笑顔から、そうした深刻なことではなさそうだと、まずは安堵の息を漏らした。それでも一応は、一体何が起こったのかと、腰の剣を外しながら、彼は、息子に問い掛ける。
―――どうした、ヒュンケル？もう、とうにおねむの時間ではないのか？何かあったのか？
―――うん……うん、ごめんなさい。本当は、ちゃんと寝なくちゃいけないこと、解っていたんだけれど。
バルトスが、怒っているわけではないことは感じ取れたが、心配を掛けていることを鋭敏に察し、ヒュンケルは、素直に頭を垂れた。そして、養父を安心させるべく、この時間まで起きていたことの説明を始める。
―――あのね、ぼく、早くこれを、とうさんに見せたくて。
差し出された、いかにも幼児らしくぷっくりとした手に握られていたのは、星を象ったペンダントだった。首紐もトップも紙で作られたそれは、ところどころ、いびつな形に歪みながらも、暗い地底の部屋にあって、場違いなほど明るく存在を主張している。よくよく見れば、ペンダントトップは、黄色いクレヨンで、丁寧に描かれたもののようだった。
―――おお、綺麗な星だなあ。これは……ヒュンケルが？
―――うん、ぼくが作ったんだ。流れ星だよ、とうさん。
トップの星を手に取り、まじまじと見入るバルトスに、ヒュンケルは、にこにこと説明をする。
―――あのね、ぼく、これをとうさんにあげる。
―――な……なんと！？
―――えへへ……ねえ、とうさん。ぼくが首に掛けてあげるから、もうちょっと、こっちに来て。
―――おお……おおおう……。
バルトスは、感激のあまり、言葉もない。

５年前、崩れた瓦礫の中で泣いている姿を見付けたとき、ただその、か弱さを憐れに思い、より力ある者の責務として、騎士道精神から抱き上げた、赤子。あの日から今日まで、時に心配や苦労を抱えながらも、すくすくと育ちゆく子どもとの生活は、そうした辛さをはるかに凌ぐ、喜びや張り合いを、彼にもたらしてくれた。バルトスにとっては、ただヒュンケルが健やかに笑っていてくれることだけが望みで、それ以上のものなど、欲したことはもちろん、想像したことさえなかったのだ。
しかし今、眼前に差し出された明るい星は、守られるばかりであった小さな息子が、自らの手で何かを生み出せるほどに成長したということを、教えてくれている。たとえそれが、多少の拙さを伴うものであったとしても、幼子を育てる親にとって、これほどの幸せがあるだろうか。ましてや、その成長の証を、かたちとして、捧げてくれるとなれば。
まるで、はるか昔に失した血潮が、全身を駆け巡るかのようだ。ああ、生命とは、こんな風に温かいものだった。思い出しながら、我知らず、身体が小刻みに震えさえする。
そんな養父の首に、ヒュンケルは手を伸ばすと、そっと紙製のペンダントを掛けた。
――――えへへ……。
わずかに照れ臭そうに、そして、それ以上に誇らしげに、ヒュンケルは、バルトスの胸元の星を眺める。少年にとって、誰よりも立派で輝かしいひとを飾るのに、それは、いかにもふさわしいものに思えた。
――――とうさん、かっこいい。
６本の腕のうち、２本を使って、丁重に星を掲げたバルトスは、感激の面持ちで息子を見遣った。
――――ありがとうなあ、ヒュンケル。これは、ワシの宝だ。大切にするからなあ。
――――うん！……あのね、とうさん。
――――ん？
そこで、ヒュンケルは、部屋の奥に駆けていくと、床に広げてあった１冊の絵本を手に、再び養父の元へ戻った。

———ほら、これ。ぼくね、子熊が見た、この星を真似して、それを作ったんだよ。
バルトスが時折、打ち捨てられた廃村から、幼い息子のために見付けてきた数冊の絵本は、この部屋に持ち込まれた段階で、すでにぼろぼろのものも多かった。中でもとりわけ、ヒュンケルの気に入りのこの１冊は、綴じた糸もほつれかけ、かろうじて書物としての体裁を保っている。もっとも、そのおかげで、目当てのページを開きっぱなしにしておくことも、容易であったことだろう。ヒュンケルが、一心に作業していたとおぼしき部屋の片隅には、切り刻まれた紙の破片が散らばり、彼が、苦戦しつつも集中して、この贈り物を作りあげた様子が偲ばれた。
そんな苦労を微塵も見せず、バルトスの前で、ヒュンケルは、ひたすらにうれしそうに顔を輝かせている。
———とうさん、流れ星を見たことはあるけれど、お願い事をしたことはないって言っていたでしょ？お星様が流れるのは一瞬のことで、その間にお祈りするのは、とても難しいことなんだって。神様は、すぐにお顔を隠しちゃうって。だからね、それでぼく、これを作ったんだ。
幼児特有の熱っぽさで語られる話は、なかなか要点が見えてこない。それでも、心の内を伝えようと、生き生きと語る息子の姿は、なんともいえず愛らしく、バルトスは、根気よく頷きながら、話の続きを促してやった。
———ほら、この星ならね、消えないでしょ？だから、とうさんの、どんなお願い事でも聞いてもらえるよ。
———ヒュンケル……。
先ほど、手製のペンダントを差し出されたときにも、子の成長に感激したバルトスだった。しかし今、息子の語る言葉を聞き、その心情に思い至ると、さらに大きな感動が、骸の身体を震わせるのを、感じずにはいられなかった。
この子が示してくれたのは、単に物体としての贈り物ではない。それは、養父の願いを叶えてやりたいという、思いやりであり、愛であり。最上の、無垢なる心を捧げてくれたのだ。
———ヒュンケル……ありがとう。本当に、ありがとうなあ。

———えへへ。
魔王に仕える身であり、時として、敵対するものの生命を、奪わざるを得ない立場でもある、地獄の騎士。そんな自分には、神とは、どこまでも遠く、異次元の存在であると感じてきた。それこそ、絵本の中で、完全なるお伽噺として語られる存在でしかないのだと。けれど、暗い地底にあってもなお、白く光り輝く笑顔を向ける幼子の姿は、あたかも、かのひとが遣わしてくれた、天使のように思われる。罪深い自分の道に、こんなにも温かな祝福が与えられていたことに、バルトスは、生涯で初めて、心からの感謝の祈りを神に捧げるのだった。
———ね、とうさん。
———……ん？
物思いに耽っていたバルトスは、呼び掛ける息子の声に、反応するのが、少し遅れた。
———とうさん、お星様に、どんなお願い事をするの？
期待に溢れた顔で、ヒュンケルは、まっすぐにこちらを見つめている。おそらくは、手段を手に入れたからには、養父には、すぐにでも叶えたい願いがあると思っているのだろう。人生を歩み始めたばかりの、まだ、その重みも哀しみも知らぬ、純真な子どもらしい笑顔だった。明るい瞳を見つめながら、たまらない愛しさと、わずかな切なさの入り交じった息をはき、バルトスは、微笑んで答える。
———そうさなあ……今はまだ、やめておくかな。
———えええっ！？なんで？
驚きのあまり、目尻のすっとした切れ長の目を、ヒュンケルは真ん丸に見開いた。心の内が、素直に顔に出る純粋さに、バルトスは、微笑まずにはいられない。
———このお星様は、お前がワシのために作ってくれた、特別に大事なものだからな。何をお願いするか、よく考えて使わないと、もったいないだろう？
バルトスが、すぐにでも願を掛けるものと想像していたヒュンケルにとって、養父のその言葉を聞くまでは、事態は、あるいは多少の不満を覚えるものであったかもしれない。だが、彼の手製の星を、養父がないがしろにしているわけではなく、むしろ非常に尊重し、

心底喜んでいることを察し、驚愕に開いた瞳は、ふわりと和らぎ、愛くるしい笑みへと変わる。
―――特別、かあ。
―――ああ、特別だよ。
バルトスもまた、本来は暗い眼窩でしかないはずの目に、柔らかい炎を灯して応えた。
―――ここぞというときに、とっておきの願い事を、な。大切に、大切に使わせてもらうよ。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝★＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「結局」
ヒュンケルの口調は、若干の切なさを含みながらも、圧倒的な懐かしさと、思慕の色に染められていた。マァムにさえ見せたことのない、特別な光を湛えた眼差しで、青年は夜空を見上げている。
「養父の願い事が何であったのか、そもそも、あの星に願う機会があったのか……聞くことは、ないままだった」
「……そう」
どう返事をすればよいのか、瞬時に判断することは、難しかった。語られた物語が、彼にとってどれほど大切なものであるかが解るだけに、軽い言葉を口にしたくない。
マァムは、かつて地底魔城の中で、ただ一度耳にした、バルトスの声を思い出す。
恨むなら、自分を恨めと、あの声は言った。
異種族の子を育てるには、想像を絶する苦労があったことだろう。それでも、それをはるかに凌ぐ強い気持ちで、慈しみ守ったはずの、愛し子。そんな相手に遺すものとして、ああまで哀しい言葉があるだろうかと、マァムは思う。
忘れないで欲しかったのではないか。覚えていて欲しかったのではないのか。本来、恨みなどでは決してなく、優しかった時間、交わ

した笑顔、とても幸福だったことこそを。
それでもなお、自分を犠牲にすることを、あの声は求めた。そうすることで、あのひとは、きっと――。
「ねえ、ヒュンケル」
自らの腹部に、そっと手を当てながら、マァムは語り掛ける。
「私、なんとなく、お養父さんの願い事、想像がつく気がするの」
解るとは言えなかった。それでも、ヒュンケルの手が置かれた肩や、自分の手が当てられた腹部から、全身に広がる温もりが、きっとそうだという確信を、彼女に与えてくれていた。囁きのように小さな声にも関わらず、その音は、確固たる強さを伴って、ヒュンケルの耳朶にも届く。
「……ああ」
見下ろす彼女の視線を追いながら、彼は同意する。
「解る気がする……オレにも、今なら」
柔らかい光に満ちた瞳を、マァムは、ついと上げる。同時に顔を上げたヒュンケルと、眼差しが宙で交わった。
「いつかまた、今日の話を聞かせて欲しいわ……この子にも」
腹部に置かれたままの手が、愛しげにそこを撫でた。
「今日の話？一体、何を話そうか？」
「何もかも。ね、全部聞かせて欲しいわよね」
膨らみは、まだあまり目立たない。けれど確かにそこにいる、この秋と冬を母の胎内で夢見て過ごし、春の目覚めを待つ我が子に、マァムは優しく語り掛けた。そして再び、視線を愛する夫に向ける。
「熊の父子の話、おそらのとびらの話、あなたが作った流れ星の話。そして、お養父さんのこと」
「……そうだな」
一拍おいて、ヒュンケルは応じる。
「養父のことを……オレたちの子には、知っておいてもらいたい」
そして、覚えておいてもらいたい。自分の生命が、どう守られ、繋げられてきたのかを。
「そうよ……だって、この子の、おじいちゃんだもの」
ふわっと微笑んだマァムは、何かに引かれたように、遠くを見上げ

た。
「あっ……！」
その声に、ヒュンケルも、反射的に視線を空へと飛ばす。微かに揺れていた瞳の端。藍色のキャンバスに、神の絵筆が、すっと銀の線を描いていた。
前もって、話し合うこともなかった。だが、若い父と母は、胸の内、同じ願いを天に捧げる。

神様。どうか、この子と
幸せに、幸せに、幸せに―――。

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝★＝＝＝＝＝

怒り猛った魔王が去っていってから、どれくらいの時が流れたのだろう。案外、長い猶予が与えられた気もするが、おそらく実際には、それは刹那と呼ぶべきものだったのかもしれない。
バルトスは、冷たい床の上、動くことも叶わぬまま、終わりのときを待っていた。
いつか、こんな日が来るのだと、理解していたし、覚悟もしていた。そのときに備え、密かに隠し持っていた、魂の貝殻。育んだ子に遺す言葉を、籠めることも、なんとか出来た。
思い残すことはない。ない、はずだ。
―――本当に？
ぼろぼろと、我が身が崩れていくのが判る。一切合切の力は失われ、きっともうすぐ、何もかもが感じられなくなることだろう。
遠くから、誰かの声が近付いてくる。悲痛な必死さで、自分のことを呼んでいる。
でも、これも幻かもしれない。
アンデッドである自分にとって、死は親しいもののはずだった。それなのに、心の奥底に残る執着、もう少し、もう少しだけ生きてい

たいという思いが、きっと都合のいい幻影を見せているに過ぎないのだ。
それでも、うれしかった。最期に、最愛の存在を、眼前に感じていられることが。
――――思い出を……ありがとう……。
届くことも期待しないまま、ただ告げたかった言葉を口にする。その衝撃のためだろうか、一気に身の崩壊が進むのを自覚した。
虚空にのまれゆく視界の隅に、何か明るいものが映った。暗い世界に赴く道中に、不釣り合いなほどの、鮮やかな色。
ああ、これは流れ星だ。あの子が、自分に見せてくれた。

――――ここぞというときに、とっておきの願い事を、な。

扉が閉じてしまう前に。光が見えなくなる前に。

神よ。どうか、あの子が
幸せに……幸せ、に………………しあわ、せ………………ニ
――――。

終